月刊島民

橋を渡る人の「街事情」マガジン

中之島

Vol.21 2010

大坂の幕末

月刊島民ナカノシマ大学

高島幸次

（大阪天満宮文化研究所）

「風雲急!?
幕末大坂の風景」

申し込み受付中!

概説 大坂幕末伝

30分でわかる！

高島幸次（大阪天満宮文化研究所）

大河ドラマの放映もあり、「幕末ブーム」とまで言われるこの頃。しかし、こと「大坂の幕末」となると意外に知られていない。教科書でおなじみの有名人たちが京都や江戸、あるいは長州や薩摩などで、「ニッポンの夜明け」をめぐる攻防を繰り広げていた時代、大坂の人々は何を思い、どう動いていたのか。

構成／大迫力　松本 創（共に本誌）

黒船と大地震と牛鍋屋

「幕末」といえば、一般に嘉永6年（1853）6月のペリーの浦賀来航以後をいう。しかし、大坂の人々がそれを実感するのは、翌年の9月18日に、ロシア海軍中将プチャーチン率いる軍艦「ディアナ号」が天保山沖に現れたときだろう。プチャーチンは大坂町奉行との面会を要求したが、応対した町奉行所の与力らは、幕府の方針に従って下田港へ回航することを要請、10月3日、ディアナ号は天保山沖から去った。

ディアナ号の停泊中、大坂城代・町奉行は、近隣諸大名に天保山沿岸を警護させるとともに、市中には御触れを出し、流言飛語に惑わされて商取引が滞ることのないように命じている。しかし、天保山には黒船見物の野次馬が集まり、なかには小船を調達して黒船に漕ぎ寄せるツワモノまで出たという。

この黒船騒動の前後、6月14日と11月4日の二度、大坂は大地震に見舞われている。特に11月の地震は高潮を伴い、大坂三郷だけで273名の溺死者を出した。我が国では、古くから天変地異を為政者の不徳や失政のせいだと見る災異思想が浸透していたから、黒船騒動と地震被害は、人々に世情不安を抱かせるに充分だった。

大地震の翌年（安政2年・1855）3月9日、22歳の福沢諭吉は緒方洪庵の適塾に入門した。そのころ、遠く離れた庄内（山形県）では、26歳の清河八郎が旅行の準備に忙しく、同月19日には、母を伴って、半年にも及ぶ西国大旅行に出発している。

諭吉の自伝『福翁自伝』には、4年に亙る大坂での塾生活が活写され、難波橋近くの牛鍋屋で酒を呑んだというような幕末大坂らしい風景も描かれている。一方の八郎は、旅の途中に何回か大坂に立ち寄り、その紀行文『西遊草』に、（大坂は）町人の地にて、武士気のあるまじき所」と興味深い感想を記した。

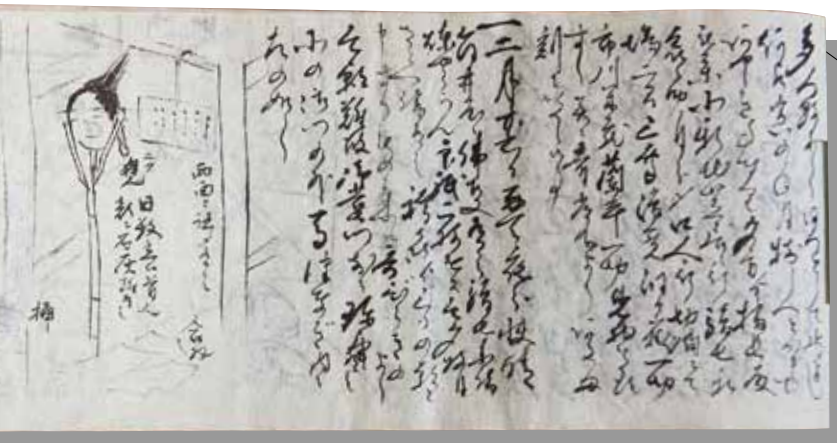
史料で読む「大坂の幕末って？」❶

「当代一の蘭学塾」に学んだ緒方チルドレンの気風

名医であり、蘭学の大家であった緒方洪庵（「健康」「治療」なども洪庵の訳語といわれる）の適塾に集まった塾生たちの猛勉強ぶりは『福翁自伝』に詳しい。安政2年（1855）に入門し、第10代塾頭を務めた福沢諭吉は「緒方の書生は学問上のことについてはちょっとも怠ったことはない」と胸を張る。その内容は、西洋医学や物理の原書を自ら翻訳しつつ、ひたすら読み進むこと。月に6回、等級ごとに会読があり、それが試験代わりだった。

諭吉の平均的な1日はこうだ。夕方食事の時に酒を飲み、いったん仮眠。夜10時ごろに起き、そこから夜を徹して書を読む。夜が明け、台所で飯炊きが始まるのを合図に一寝入り。朝飯を済ませたら銭湯へ行って朝風呂。戻ると再び、夕方まで読書…。

蘭学塾生だから、開国か鎖国かと問われれば、もちろん開国派だったが、「医師の塾である



殺されたのは堺の商人・大谷仲之進。商品を買い込んで外国と交易をしたことが反感を買ったらしい。犯人である浪士二人組も切腹したことが分かり、大坂中の話題になったと武兵衛の日記には記されている。大阪大学日本史研究室所蔵

から政治談はあまり流行せず」。地位や金儲け、世情には目もくれず、ただただ新しい知識と物の見方を学ぶことだけに喜びを見出す「目的なしの苦学」が、結果的にニッポンの夜明けを担う人材を多数育てたのだった。

塾と診療所を兼ねた適塾の所在地から、洪庵は「過書町（現在の北浜３丁目）の先生」と親しまれた。塾生が奪い合うようにして使った辞書『ヅーフ・ハルマ』は、現在も適塾に展示されている。

波は自分次第でい一〇つでもそこにあるニ〇ものだが実はどん三〇なときでも目の前四〇にあるものなのだ五〇海にあるとは限ら六〇ず山にあるかもし七〇れないし自分の心

政局変転

8年後の文久3年（1863）2月、清河八郎の献策に従い、幕府は上洛する将軍・家茂に先立って、将軍警護のための浪士組を上洛させた。しかし上洛直後、八郎が尊王攘夷を旨とするように扇動したため、近藤勇らは浪士組を離脱して壬生浪士組（のちの新選組）を結成した。彼らの京都における活躍は知られているが、大坂での足跡も少なくない。

同年4月、浪士組は今橋の平野屋から100両、鴻池屋から200両を調達し、6月には堂島で大坂力士数十名を殺傷する事件を起こしている。八郎は『西遊草』で、堂島を見物した際に「大阪町人は多く角力（すもう）を抱えあるゆえに、角力のいずること夥しく、堂島ばかりにて八十人もいでたる」と記しているから、かつて八郎が見かけた力士がこの時の死傷者の中にいたかもしれない。

この年、京都では「八月十八日の政変」により、薩摩藩などの公武合体派が、長州藩らの尊王攘夷派を京都から追放し、政局は大きく動いた。都を追われた三条実美ら尊攘派公卿7名は、大坂の長州蔵屋敷を経由して長州に落ち延びている（七卿落ち）。これに先立ち、大和では尊攘派の公卿・中山忠光を擁した天誅組が挙兵していたが、この政変により形勢不利となり、まもなく壊滅。逃れた忠光は、翌元治元年（1864）2月27日に、長州藩蔵屋敷に逃げ込んだ後に、長州へ向かった。長州本藩では、勢力挽回のために千数百名の軍勢を上洛させることを決し、このうち家老・福原越後の率いる500名が、6月22日に長州藩蔵屋敷に一泊している。長州軍は上洛後、鳥羽・伏見で薩摩藩と戦端を開いたが、7月18日の禁門（蛤御門）の変で敗退した。

長州藩蔵屋敷の取り壊し

長州藩は、西区土佐堀1丁目（大阪YMCA国際文化センター付近）にあった土佐堀屋敷のほか、江戸堀・富島にも蔵屋敷を設けていた。蔵屋敷とはいっても、単に年貢米や特産物を貯蔵・販売するための倉庫としてだけではなく、藩邸として使用され、有事には兵站基地にもなりえたのである。

禁門の変に勝利した幕府は、7月22日に朝廷から長州藩追討の勅命を受けると、その翌日には長州藩邸の取り壊しを命じ、8月には軍資金調達のため、大坂の富商100余人に2万7000貫の御用金を課した。その翌月、高麗橋に掲出された「張紙」は、長州藩邸の取り壊しは「無益無体」だと切って捨て、禁門の変のために「米薪など諸品、益々高値」になったと痛烈に批判している。

「天誅なう」!? 幕末版twitterで、町民たちの不安増す。

史料で読む「大坂の幕末って？」②

町人たちの漠然とした不安をさらに増大させたのが、こうした「張紙」。不正をはたらく役人や、利益を独占する商人、風紀を乱す男女を糾弾するもので、橋のたもとや市場など不特定多数の人が集まる場所に張られた。もちろん書いた当人は匿名。幕末版ツイッターもしくはネット掲示板と言えるかもしれない。

例えば『鍾奇齋近世風聞雑記』という日記の文久3年（1863）8月10日の項には、「天満橋ニ張紙アリ。城代・町奉行以下諸役ノ弊風ヲ指摘シ、又浪士ノ挙動ヲ風諫ス。」とある。同じく8月17日の日記にも「堂島市場茶店ニ張紙アリ。買占ニヨリ米穀ヲ騰貴セシムル者、速ニ其罪ヲ改メザレバ誅戮を加フベキヲ告グ。」とあって、これは米を買い占めて値段を吊り上げる商人に改めなければ危害を加えるという脅迫文である。

暗殺も横行していたようで、張紙と一緒に生首が置かれたりもした。後述する『諸事用向日加栄』には、文久4年2月26日、難波御堂の前で首が晒されている様子がリアルに描かれている。こうした事件の積み重ねが、少しずつ社会不安をあおっていったのである。

弘化2年（1845）、大阪天満宮の境内が描かれた「浪華天満聖廟之図」。慶応3年には大坂城に入った徳川慶喜警護のために、新選組がここに陣を構えたこともある。多数の隊士たちは本殿東側の「参籠舎」などの社殿に宿泊したと考えられる。大阪天満宮所蔵

さて、追討軍の総督に任じられた徳川慶勝（前尾張藩主）は、1万2000余の軍勢を率い、10月15日には津村坊舎（現、津村別院）に陣を構え、大阪城に諸藩の家老を集めて軍議を開いた。結果、35藩15万人の軍容による出兵となったが、長州藩が恭順したため、12月には撤収が決まった。

興味深いのは、慶応2年（1865）5月29日に長州藩邸跡への参拝を禁止する御触れが出されたことである。この頃、藩邸跡地に参拝し、絵馬を掛け、線香を立てる人が多かったのだ。藩邸取り壊しを批判し、跡地に参拝する心情は、大坂人の「幕府きらい」と無関係ではないだろう。

内山彦次郎の暗殺

このような不穏な情勢のなか、大坂では「天誅」が横行した。「天誅」とは「天に代わって罰する」ことをいう。先の「天誅組」もこの思想による命名である。

元治元年5月20日、西町奉行所の与力、内山彦次郎が浪士に暗殺され、天神橋南詰に晒された事件は衝撃だった。今橋の「張紙」には「天下の奸賊」とあり、京都四条の「張紙」には、内山が倒幕派志士に通じて物価を吊り上げたことへの「天誅」だとあった。事実、両替商の番頭・平野屋武兵衛も、「筆頭与力にて得手勝手の事取りさばく、市中困り入り候て、兼ねてはかようの儀にてもこれあるべく」と暗殺を肯定するかのような感想を残している。

彦次郎に対する悪評は、17年前に彼が大塩平八郎の捕縛にあたったことに関わるのかもしれない。「大坂市中、殊のほか平八郎を貴び候よし、甚だしきは焼きたくられ候者まで少しも怨み申さず」（浪華騒擾紀事）という「大塩びいき」が根強かったからである。その反面、彦次郎は能吏として高い評価を得ており、安政2年（1855）5月には「貞実に出精相勤め」たことを賞され「御譜代」に仰せ付けられている。ちなみに、この暗殺は新選組の仕業で、先の大坂力士事件の際に吟味に当たった内山を逆恨みしたのだという説もあるが、信憑性に乏しい。

第二次長州戦争の兵站基地

話を政局に戻そう。第一次長州戦争の後、長州藩論は逆転し、高杉晋作らの主戦派が藩政を握った。そこで幕府は、慶応元年（1865）5月に紀州藩主の徳川茂承を先鋒総督に任命、翌閏5月には、将軍・家茂が大坂城に入った。このとき、新選組も来坂している。

9月には再度の長州藩追討の勅命が下り、諸藩の軍勢は大坂に結集したが、軍事費の調達が思わしくなく、

史料で読む「大坂の幕末って？」③

政局に翻弄される商人たち。"無党派層"ゆえの憂鬱。

物流の拠点であった大坂の商人たちは、物価や金銀銭・米の相場を左右する政変や事件には敏感であった。それを知る最良の史料が、今橋2丁目の両替商「平野屋孫兵衛」の大番頭である平野屋武兵衛が残した日記『諸事用向日加栄』である。

一例を挙げよう。明治維新が間近に迫る慶応3年（1867）、ついに大坂も開市となり、外国との交易が始まる。武兵衛はこれにより商売が大変になったとするが、それよりも江戸と京都が不和であったり、幕府が長州征伐を行ったりする方が問題であると書く。そして「ミなゝ和合シテ日本国中一手にて外国ヲ次第ゝニシリゾケル」べきであるとの持論を展開するが、これは単に彼が攘夷論者であることを意味しない。変化を好まず平穏に暮らしたい、うまくいっている商売を政治のゴタゴタで失いたくないという極めて商売人ライクな考え方である。

"無党派層"とも言うべきこうした態度は、幕末の大坂商人に共通する感覚だったのではないか。とは言え維新後には、いわゆる「大名貸し」の踏み倒しなどで、両替商のほとんどが店を閉めてしまうのだが。

史料で読む「大坂の幕末って？」④

夏祭りの中止に見る、やっぱり「反江戸」なムード。

実はこの年、稲荷神社・坐摩神社・御霊神社・大阪天満宮・生玉神社の五社は、世情不安を理由に夏祭り中止を表明した。これを聞いて慌てたのが新撰組。各社の関係者を呼び出し、警護をするから祭りを行えないかと申し出ている。中止になれば治安維持のために結成された自分たちの沽券に関わる。あるいは浪士組として上洛する際に、旅行中に天神祭を見物したことのある清河八郎から近藤勇たちが祭の様子を聞き、楽しみにしていたのではというのは許される推測だろう。

しかし五社ともこれには応じず。例えば大阪天満宮関係者の日記によれば「神輿や神器などを修理に出しており祭日には間に合わない」などを理由にあっさりと断った。新撰組へ出頭する前には、先に出頭していた坐摩神社を訪ねてその時の様子をうかがうなど、申し合わせていることも分かっている。

世情を考えれば妥当な気もしないではないが、毎年使う日が決まっている神輿の補修が間に合わないなどというのは、明らかに取ってつけた感じがする。ここには、世間を騒がせる新撰組や江戸幕府への当てつけの意味もあったのか。楽しみにしていた夏祭りの中止に、さぞや大坂の人々はがっかりしたことだろう。

出兵の名分が乏しいこともあって、すぐには派兵できない情勢だった。そのため、幕府は大坂市中の諸藩蔵屋敷や寺院・町家を徴用し、大軍の長期滞在に備えたが、それでは足りず、大阪城の馬場に仮屋を設けたほどである。

一方、長州藩では翌年1月には、坂本龍馬の斡旋により薩摩藩と軍事同盟を結ぶなど、迎撃の準備に怠りなく、戦意も昂揚していた。ようやく6月7日になって、幕府軍艦が周防大島を砲撃したことにより火蓋が切られたが、戦局は長州藩に有利に運び、7月20日には大坂城内において病臥中の将軍・家茂が21歳の若さで病死した。

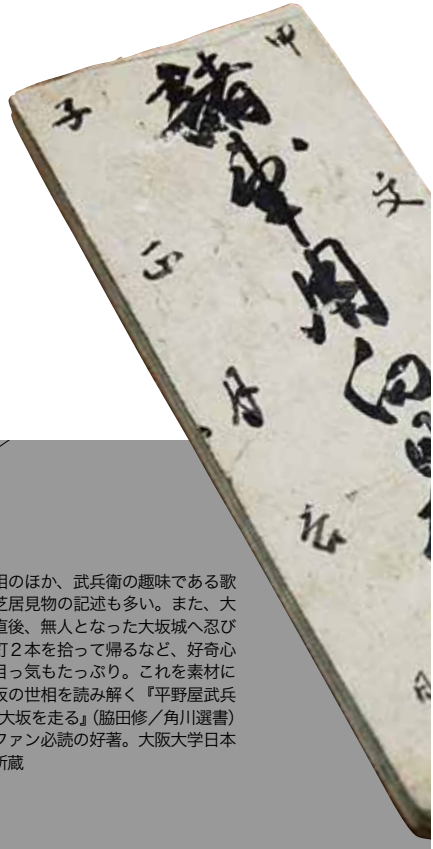
「打ち毀し」と「ええじゃないか」

幕府が出兵を躊躇する間、世情不安に輪をかけるように物価が高騰したため、大坂と近隣町村では「打ち毀し」が起こった。値下げを求める人々が、豪農・豪商などに押しかけ家屋を破壊したのである。同年5月に西宮で始まった打ち毀しは、次第に周辺に伝播し、やがて大坂市中でも頻発する。

さらに、翌慶長3年（1867）8月頃、東海地方で伊勢神宮などの御札（神符）が降ったことから、「ええじゃないか」も始まった。当初は「御札降り」だけだったが、次第に鳴物で囃しながら狂喜乱舞して豪農・豪商に押しかける「ええじゃないか踊り」に発展した。9月には大坂市中でも御札が降り、群舞が頻発している。「御札降り」は倒幕派の仕業だとする説もあるが確証はない。御札が降った家に群衆が土足のまま上がりこみ、乱舞しながら飲食の提供を受ける異常な風景は、まさに幕末の世情そのものであった。

幕府最後の将軍・慶喜が、明治天皇に大政奉還を上奏する10月14日は、目前に迫っていた。

波は自分次第でい一〇つでもそこにある二〇ものだが実はどん三〇なときでも目の前四〇にあるものなのだ五〇海にあるとは限ら六〇ず山にあるかもし七〇れないし自分の心



当時の世相のほか、武兵衛の趣味である歌三味線や芝居見物の記述も多い。また、大政奉還の直後、無人となった大坂城へ忍び込んで、釘2本を拾って帰るなど、好奇心旺盛で茶目っ気もたっぷり。これを素材に当時の大坂の世相を読み解く『平野屋武兵衛、幕末の大坂を走る』（脇田修／角川選書）は、幕末ファン必読の好著。大阪大学日本史研究室所蔵

たかしま・こうじ
大阪天満宮文化研究所研究員。大阪大学招聘教授。専門は日本近世史。大阪の歴史、特に天神祭研究の第一人者でもある。講演も数多くこなし、年に数十回も登壇することから“なにわの語り部”の異名をとる。

〝なにわの語り部〟高島幸次先生の幕末トークはライブで聞くべし！
ナカノシマ大学 5月講座→P9

幕末 滑稽新聞

「偉かった」「立派だった」の人物伝ばかりじゃ面白くない。
明治時代に土佐堀通で発刊された風刺・スキャンダル紙
『滑稽新聞』風に、トホホなシマの幕末ネタをどうぞ。

構成／□□□□□□□□□□□

実は「荒くれ書生」だった適塾生の生態

適塾生の刻苦勉励ぶりは先に紹介したが（P3）、何もただのガリ勉集団だったわけではない。金はないなりに飲み、騒ぎ、ケンカもし、たびたび大坂の町を騒がせた。難波橋の牛鍋屋から豚の頭をせしめ、解剖して調べた挙句に煮て食う。祭礼の燈籠行列を見物中、酔って杖で燈籠を叩き落とし、追いかけ回される。

洪庵センセイもこれには閉口。心なしか渋い顔？

堂島川に浮かべた船の上でアンモニアの抽出実験をし、天満橋から玉江橋辺りまで悪臭を撒き散らす…。

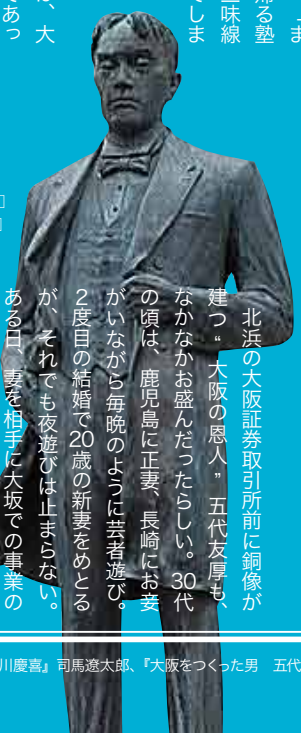
たまに料理茶屋で飲むと、猪口や小皿を“万引き”し、塾内で披露し合っていた。そこから起きたのが、ある夏の「難波橋小皿投げ事件」である。鍋島の浜（現在の裁判所付近）で安酒を飲んだ塾生たちは、船遊びに興じる金持ちに腹を立てた。「あんなやつらがあるからコチトラが貧乏するのだ」。腹いせに橋の上から小皿を3枚ほど投げつけた。最後の1枚で三味線の音がぷっつりと止む。「まずい、ケガさせたか」と逃げ帰る塾生たち。後で聞くと、芸者の三味線に命中し、表裏の皮を射抜いてしまったそうだ。

□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□

いまや「英雄色を好む」なんて胸を張れる時代じゃないが、幕末から明治の頃はそれが通用した。そのため、中之島界隈でも数々の「女難事件」が起こっている。福沢諭吉たちが北新地の遊女を騙って書いたニセ手紙に誘い出された適塾の手塚良仙（手塚治虫の曽祖父）。刺青の大姐御に引っ掛かり、金を巻き上げられた伊藤博文…。

好色一代男たちの「女難事件簿」

北浜の大阪証券取引所前に銅像が建つ“大阪の恩人”五代友厚も、なかなかお盛んだったらしい。30代の頃は、鹿児島に正妻、長崎にお芙がいながら毎晩のように芸者遊び。2度目の結婚で20歳の新妻をめとるが、それでも夜遊びは止まらない。ある日、妻を相手に大坂での事業のこと、富国強兵の夢などを語っていると、こう返ってきた。「大坂のため、日本のためですか。それやったら芸者はんを次々に可愛がられるのはなんのためです。五代家に軍隊をつくるおつもりですか。ちょうど芸者を身ごもらせたばかりだった五代は、グウの音も出なかったそうである。



□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□

最後の将軍、裏切りの「トホホ遁走劇」

江戸幕府最後の将軍・徳川慶喜は、その明晰な頭脳ゆえ、「機を見るに敏」というか、見ようによっては「権詐奸謀の人物」ということになる。有名なのが土佐堀川の遁走劇だ。

倒幕派との衝突を避けて京都から大坂城へ退いた幕府軍は、反転攻勢をかけるべく主戦論に沸いていた。慶応4年（1868）の年明け、鳥羽・伏見の戦いが勃発。慶喜は「出陣となれば即刻がよい。みな用意せよ」と煽った後、あろうことか、戦闘準備で混乱する城内をすり抜け、夜に紛れて後門から逃げ出したのである。わずかなお供を連れ、小姓のフリをして…。「こうなれば、大名育ちとは思えぬほどに機敏であった」と司馬遼太郎は皮肉交じりに書いている。天満八軒家浜から川船に乗り、深夜の天保山沖へ。同行した者たちには「江戸へ戻って態勢を整える」と思わせぶりだったが、慶喜にその気はなかった。部下たちは「謀られた」と気付いたが、もう遅い。慶喜は明治維新後、頑なに恭順を貫き、表舞台には一切出なかったという。

慶喜が逃げ下った土佐堀川。徳川嫌いの大阪人でも、さすがに侘びしい。

参考文献／『福翁自伝』福沢諭吉、『最後の将軍―徳川慶喜』司馬遼太郎、『大阪をつくった男　五代友厚の生涯』阿部牧郎

【よりぬき幕末イベント】

文／若狭健作（本誌）

京阪沿線 坂本龍馬をめぐる旅
おけいはん、龍馬とゆく！

八軒家浜から船に乗って京都へ向かった坂本龍馬の足跡を、京阪電車に乗ってたどるスタンプラリーが開催中。天満橋・中書島・祇園四条・三条・浜大津の5駅と周辺にあるゆかりの地をめぐる。京阪電車主要駅で配られているパンフレットは読み物としても充実。中岡慎太郎、桂小五郎、山田藤吉など、龍馬の生涯に深くかかわった人物にも出会える。3駅以上のスタンプを集めると「おけいはんあぶらとり紙」がもらえるのも嬉しい。大河ドラマで龍馬のとりこになった女子ならぜひ。 http://www.okeihan.net/ryouma/

朝日カルチャーセンター公開講座
教科書に書かれなかった幕末史

幕末に関する講座は数あれど、ドラマ化されるような美談を扱ったものばかり。本講座では「幕府側、奇兵隊士など、歴史の裏側に隠されてしまった敗者の視点をお伝えしたい」と講師の一坂太郎先生が激動の時代を掘り起こす。中之島界隈の史跡紹介も織り交ぜ、島民の心にどストライクな全3回の連続講座。4月17日（土）に行われる初回のテーマは「長州を潰せ！」。お申し込み・お問い合わせは朝日カルチャーセンターまで。☎06-6222-5222

ipod音声観光ガイド
文明開花 幕末維新人物伝

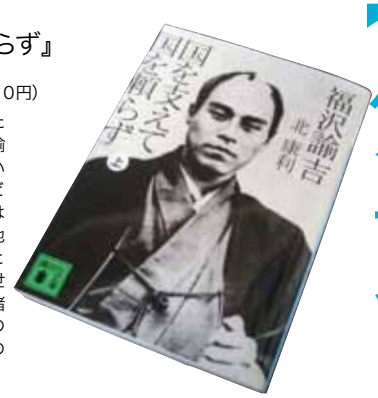
「大阪まちあるき」のホームページから音声ガイドをダウンロードしipod 片手にシマの幕末維新スポットを巡る。「福澤諭吉生誕の地」「大阪会議開催の地」など静かにたたずむ石碑も、OSK日本歌劇団の桜花昇ぼるさんの美声で、その物語を聞けば実に味わい深い。ネット上でもガイドを聞くことができるので予習にも最適。中之島駅から大阪城まで、花見がてらにどうぞ。 http://www.osaka-info.jp/machiaruki/bunmeikaika/

【バクマツ・ブンコ】

文／大迫カ　松本創　若狭健作（本誌）

『福沢諭吉 国を支えて国を頼らず』
北康利
（講談社文庫／上下巻・各520円）

白洲次郎ブームに火をつけた「評伝の名手」による福沢諭吉伝。日本を近代国家へ導いた「独立自尊」の精神が、どう育まれたかを追う。原点はもちろん適塾時代。「生涯他人の世話になることを潔しとしなかった」福沢が、唯一世話になり通しだったのが、緒方洪庵その人。美しき無償の師弟愛は、ナカノシマ大学の精神にも通ずる、か？



『幕末維新の大阪』
北崎豊二
（松籟社／880円）

江戸期の世相にはじまり、ロシア軍艦の来航、鴻池などの豪商からの御用金、米価高騰による打ちこわしなど、幕末の大坂を時代を追って解説する教科書的一冊。文芸や民衆運動、明治期の新聞や雑誌など市井の人々の暮らしに触れながらも、維新の変革に焦点を当て大阪経済衰退の原因をも探る意欲作。

『大阪市の歴史』
大阪市市史編纂所編
（創元社／2,415円）

書名の通り、大阪の歴史が時代ごとにまとめられている。先行する『新修大阪市史』をコンパクトにまとめたもので、要点が分かりやすく書かれているので一般向け。幕末については天保山への黒船来航や大地震、「ええじゃないか」など、大きな事件を中心に。時代の流れを掴むにはとても便利な一冊。

『風雲児たち』
みなもと太郎
（リイド社／550円）

トウミン月報

2010年4月1日発行

京阪電車100年の歴史を見よ！

今年で開業から100周年を迎える京阪電車では、これまでのあゆみを伝えるさまざまなイベントを企画している。

京阪百貨店守口店で行われる京阪電車開業100周年記念「百年のあゆみ展」では、同社が所蔵する鉄道に関する実物資料や模型、写真などが展示される。めったに見られない“お宝”の数々は、鉄道ファンそして大阪の街の歴史に興味がある人も見逃せない内容だ。

また、京都の三条駅でも「京都の歴史を彩った駅・街・人」と題したパネル写真展を開催する。明治43年（1910）の開業時から三条駅が地下化した昭和62年（1987）までを、10年区切りに「駅・街・人」それぞれの観点から約50点の写真を厳選。また開業日前後の新聞記事もパネル展示し、100年前の人たちにどのようにして迎えられたのかを同時に知ることができる。

100周年イヤーにあたる今年、京阪電車では今後も継続的にイベントを開催する予定だ。（大迫 力・本誌）

京阪電車開業100周年記念「百年のあゆみ展」
期間／4月8日(木)～20日（火）
10:00AM～8:00PM
（7:30PM最終入場、最終日は4:30PMまで）
場所／京阪百貨店守口店「京阪ギャラリー」

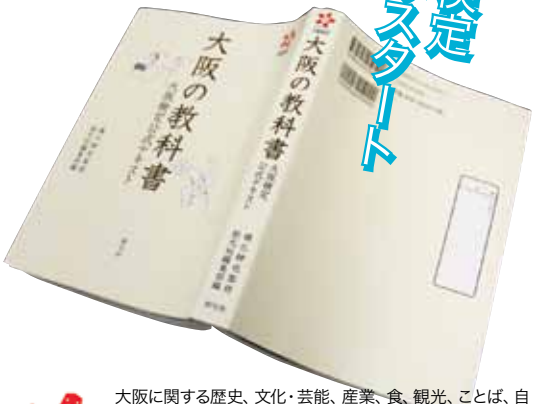
パネル展「京都の歴史を彩った駅・街・人」
期間／4月14日(水)～
場所／京阪電車三条駅コンコース

第2回大阪検定受験申し込みスタート

大阪の歴史や文化を再発見することを目的とする「なにわなんでも大阪検定」。昨年は約6千人が受験、第2回となる今年の受験申し込み受付も4月17日からスタートする。

今年からは新たに1級試験が設けられる。昨年2級に合格した人たちが対象で、これまでの四者択一形式の出題に加え、極記述式の問題が導入されるなど、難易度も上がるようだ。また、各級でジャンル、地域を特定したテーマ問題が設定され、今回のテーマは「メイド・イン・大阪～食の都大阪～」「まち探訪～伝統と歴史のまち・堺」の2つから出題がある。さらに割引や特典制度も新設され、企業やサークルなどグループでの受験者には受験料の割引も。大阪府下で実施されているご当地検定（池田学検定・さやま検定・泉州検定・だいとう検定）の合格者には持ち点が加算される場合もある。

試験日は7月4日。初めての人は、まず公式テキスト『大阪の教科書』をじっくり読むところから始めてみよう。（大迫 力・本誌）



大阪に関する歴史、文化・芸能、産業、食、観光、ことば、自然、地理、ズポーツなどのジャンルから総合的に出題される。
申し込み方法など詳細は公式ホームページにて確認を。
申込期間／4月14日（水）～5月26日（水）
問い合わせ／大阪検定事務センター☎06-6452-7728
http://www.osaka-kentei.com/index.html

なにわなんでも大阪検定

わたしと月刊島民

御舟かもめ　中野弘巳さん・かおりさん

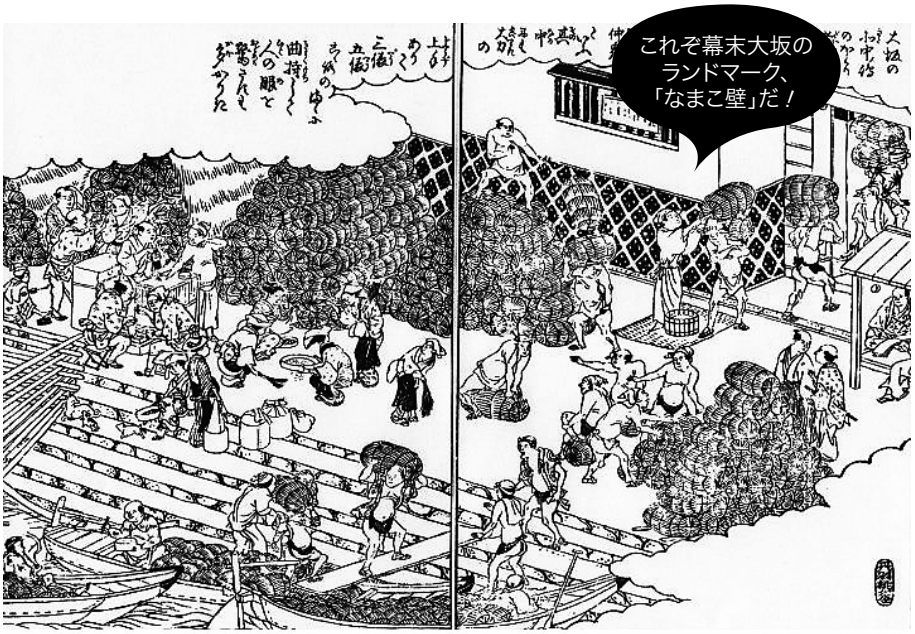
大阪の川を小さな船でめぐるクルージングをやっています。『月刊島民』にはスタート時に一度、掲載してもらいました。去年の夏でしたが、島民の読者の方は息長く問い合わせをして乗ってくれるので、本当にありがたいです。冬の間は予約の貸し切り営業だけでしたが、桜の季節に合わせて大幅に増便して、大川から中央公会堂付近まで行く50分クルーズを今月末まで毎日やっています。そうそう、朝ごはんクルーズというのもあって、朝食とドリンクがセットになったクルーズもやってます。ネットから予約できるんで、島民のみなさん、出勤前などにいかがでしょう。やっぱりクルージングには中之島は外せないので、船内で島民を配らせてもらったりしていますよ！

ナカノシマ大学
NAKANOSHIMA UNIVERSITY

21世紀の懐徳堂プロジェクト

2010年
5月講座①

「風雲急!? 幕末大坂の風景」
高島幸次 大阪天満宮文化研究所



『摂津名所図会』より

『龍馬伝』には出てこない、ドラマチックな幕末大坂をご覧あれ！

米市場が栄え、諸藩の蔵屋敷には日々、多くの産物が出入りし、町は人たちの活気で満ち溢れ…。天下の台所と言われてもてはやされた江戸時代の中期から一転、大坂の幕末となると急にイメージが乏しくなるのはなぜだろう。開国か鎖国か、迫り来る列強の圧力と、内政のドタバタ劇の中で、大坂の町もまた揺れ動いていたはずだ。そんな幕末大坂の風景を、今月号の特集にもご登場いただいた“なにわの語り部”こと高島幸次先生のライブトークで再現。幕末の人々が見ていた景色・世相を、当時の史料や現存する遺構を手がかりにして探っていきます！

募集要項

「風雲急！？ 幕末大坂の風景」
講師／高島幸次
日時／5月20日（木） 7:00PM～（開場6:30PM～）
会場／追手門学院 大阪城スクエア →地図P23
受講料／ 1,800円
定員／ 150名
主催／ナカノシマ大学事務局
協力／大阪21世紀協会 追手門学院

お名前・ご住所・電話番号を明記の上、下記までハガキ、ファックス、もしくはHP内の応募フォームからお申し込みください。ハガキ、ファックスについては、複数名でご参加希望の場合は、人数分の必要事項を明記してください。ハガキ、ファックスでお申し込みの方は、講座名を必ずお書き添え下さい。

〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古河大阪ビル4階
「月刊島民ナカノシマ大学5月講座」受付係 FAX.06-4799-1341

※先着順で受付を確認し次第、順次、受講票をお送りします。
※定員に達した時点で申し込みは締め切らせていただきます。

ナカノシマ大学の最新情報は http://www.nakanoshima-univ.com

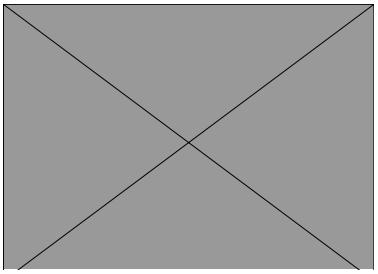
お問い合わせ▲06-4799-1340
（ナカノシマ大学事務局）

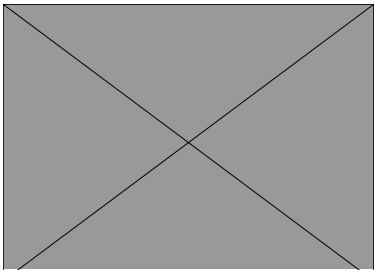
2010年
5月講座②

「お爺ちゃんと俺の二人展」
レンジャー前田 写真家

中之島の過去と現在が写真でつながる！

今月号の「ナカノシマニア」（P20）でご紹介した写真家のレンジャー前田さんは、約３年前から祖父が撮った大阪や京都の風景を追い、ブログや講演会などで公開している。今回はそれをナカノシマ大学特別講座としてアレンジ。近代建築の芝川ビルを舞台に、前田さんのこれまでの作品をスライド上映。さらに自由参加で、前田さんと共に中之島周辺の撮影会も。プロの写真家に「中之島の撮り方」を伝授してもらうチャンス！　カメラを持ってご参加下さい。





募集要項

「お爺ちゃんと俺の二人展」
講師／レンジャー前田
日時／5月15日（土）　上映会：10:30AM～（開場10:00AM～）+撮影会：12:00PM～
※撮影会は自由参加、自由解散です。
会場／芝川ビル（→地図P23）　受講料／2,500円　定員／40名
主催／ナカノシマ大学事務局

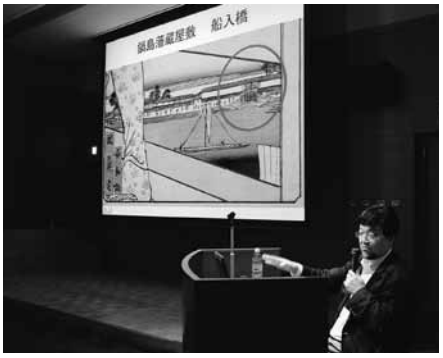
◎ご注意　こちらの講座へのお申し込みはハガキ、ファックスのみとなります。
宛先はＰ９の募集要項をご覧ください。講座名を必ずお書き添えください。

ナカノシマ大学 NAKANOSHIMA UNIVERSITY **講義レポート**

2月12日（金）

謎解き!? 浮世絵『浪花百景』を見よ

@大阪大学中之島センター　講師／橋爪節也



幕末の大坂の風景を３人の浮世絵師が描いた『浪花百景』。その絵から何が読み取れるか、ネタ元はどこにあるのか、何ゆえこの構図となったのか…。大坂の歴史・風俗に関する知識と綿密な史料調査を基本にしながら、奔放に推理と想像を広げる橋爪先生の“浮世絵探偵”ぶりは圧巻だった。

『浪花百景』は、一珠斎国員、一養斎芳瀧、南粋亭芳雪の合作による100枚組の錦絵（浮世絵の多色刷り木版画）。安政年間に北浜の版元から出版された。その少し前に盛んに出された各地の名所図会をタネ本に、絵の一部をクローズアップしたり、アングルを少し変えたりした作品も多く、ネタ元を探し当てて見比べると、作者の意図が見えてくるのではないか、というのが橋爪先生の狙い。

例えば、国員の「堂じま米市」。押し合いへし合いしている群集の足元、それを少し離れた位置から眺める人たちの後ろ姿が描かれている。橋爪先生は、ネタ元を『米穀売買出世車』に描かれた競りの風景と特定。「足の群集は競りに熱中する人たち。地面にあるキセルは、熱中し過ぎて落としたんでしょう。離れて見ている人が肩をはだけてヨレヨレなのは、人の輪にもみくちゃにされて、ちょっと休んどるんでしょうな」と読んだ。さらに、「描かれていない部分では、市の終了を知らせる水がまかれていたかもしれないし、それに構わず突っ込んで行くやつもいたでしょう」と想像は広がる。

圧巻は、四天王寺の鳥居の上に唐突に描かれた扇子の謎解き。橋爪先生は、これを「縦横だけの描線だと単調になる構図に動きを持たせる意図だろう」と見立てる。確かに扇子は斜めに飛んでいて、鳥居の向こうにも斜めに隊列を組む鳥の群れが描き込まれている。試しにその二つを画像処理で消すと、何とも味気ない絵になった。

歴史知識と美術的解釈、それに自由な推理力を駆使した“浮世絵探偵”の鮮やかさを見せつける講座だった。

大阪が誇る多彩な才人、75名を一挙に紹介！

大阪21世紀協会ホームページ『大阪ブランド情報局』の人気連載『多士彩才』。
大阪を愛し、文化・まちづくりなどいろいろなジャンルで、
大阪を元気にしようと活躍しているアーティスト・クリエイター・プロデューサーなど、
多彩な才人75名を一挙に紹介した同コンテンツを、このたび書籍として出版いたしました。

◉A5版240ページ　定価／1700円　発行／財団法人大阪21世紀協会　発売／新風書房

財団法人 大阪21世紀協会
大阪の主要書店にて発売中！
〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1
大阪キャッスルホテル4F
Tel.06-6942-2004
Fax.06-6942-5945

21世紀の懐徳堂プロジェクト
4月の時間割 ナカノシマ大学ほか、中之島周辺の「学びの場」の時間割をご紹介。

大阪カルチャークラスター!

大阪カルチャークラスター!! (OCC!!) では、大阪にあるカフェやギャラリーなどで独自に企画・運営を行っている講座・ワークショップを一堂に集め、紹介していきます。※ワークショップについてのお問い合わせは各店舗へお願いします。

9	金	7:00PM〜8:00PM	「夜長堂のZAKKAな宴トークショー」 定員：先着15名　参加費：1,050円（1ドリンク付） 出演者：夜長堂（紙もの＋古道具）、IRIIRI（人形作家）、Subikiawa食器店（ガラス作家）、玉井恵里子（タピエ主宰） 全く違う表現方法で活動を展開する4名。「雑貨」という共通点で結ばれた、各作家を動かす原動力をひも解いていきます。	会場F
1	土	1:00PM〜3:00PM	「版画で読書感想文」タカトモ（消しゴム版画作家） 定員：先着4名　参加費：2,100円 作家と一緒にオリジナル消しゴムはんこを作ります。道具はご用意していますので、手ぶらでお気軽にお越しください！	会場F
1	土	5:00PM〜7:00PM ※終了後、交流会あり	「奥村昭夫デザインワークショップ」 参加料：3,800円（一括払いの場合、割引あり／交流会の料金は含みません） グリコのロゴや牛乳石鹸のパッケージなどで有名なグラフィックデザイナー、奥村昭夫氏によるデザインワークショップ。	会場C
11	日	0:30PM〜5:00PM	「Plain Life 革小物教室」尾崎 美穂（革小物作家） 受講料：5,000円（材料費・テキスト・ドリンク込み） millibar salonでお茶をしながら物作り。基本のカタチに工夫を加えて、あなただけの革小物にチャレンジです。	会場G
13	火	7:00PM〜8:30PM	「落語を楽しむ」桂蝶六（落語家） 受講料：2,000円 登場人物の目線や背景などを理解しておくことで、落語鑑賞がもっと面白くなります。	会場D
16	金	7:00PM〜	新世代シリーズpart2「純正建築論・その先に見えるもの」 ゲスト：藤村龍至（建築家）　参加費：1,000円（1ドリンク&おつまみ付） 若手論客として、また「TEAM ROUNDABOUT」「批評的工学主義」で注目される藤村さんに登場いただきます。	会場E
16 18	金 日	1:00PM〜4:00PM	「やきものキノコを作ろう」HOSOH（陶芸作家） 参加費（送料込み）525円（きのこ1つ） 土をこねて色を塗って模様をつけて、オリジナルのやきものキノコを作ります。作家が焼いてご自宅に郵送します。 ※随時受付、制作時間約20分	会場F
18	日	10:00AM〜1:00PM 2:00PM〜5:00PM	「トリ・スクール」岡山 拓（美術家） 受講料：2,500円（1ドリンク付） 展覧会カタログを参照しながら、初めての人でも分かるようにゆっくり美術史や各種ムーブメントについてお話をします。	会場G
18	火	2:00PM〜/5:00PM〜	『Tea&Biscuit』紅茶セミナー」Yuriko　受講料：2,000円（要予約） 様々な音楽イベントや展示企画でオリジナルの紅茶サービスを提供されているYURIKOさんによる紅茶セミナーです。	会場B
19	月	7:30PM〜9:00PM	「石原正一のヨミすぎ！〜古今東西名作朗読会〜」石原正一（役者・作演出家） 受講料：1,500円 古今東西の名作を参加者全員で読みまくる夜です。具体的に配役に分けて、名作文章の世界を楽しんでいただきます。	会場A
24	土	1:30PM〜3:30PM	「mosamosa*cosage」Mosaique（アクセサリー作家） 定員：先着5名　参加費：2,940円 レース・オーガンジー・フラワー等を使用して『ナチュかわ』コサージュを作ります。	会場F
24	土	7:00PM〜9:00PM	「シャベルvol.5」 参加料：500円（1ドリンク付き） おすすめのモノや場所、温めているアイデアなど、クリエイティブに関するトピックを紹介し合うギャザリング。	会場C
27	火	7:00PM〜8:30PM	「楽しむ紅茶」納多寿恵子（ティーライフコーディネイター） 受講料：2,000円（紅茶・お菓子付き）　おいしい紅茶の淹れ方と、紅茶の効能や産地、TPOにあわせた楽しみ方などをご紹介します。紅茶とお菓子をいただきながらの講習会で	会場D

A common cafe
大阪市北区中崎西1-1-6 吉村ビルB1F
▲06-6371-1800　http://www.talkin-about.com/cafe/
B 雑貨屋Biscuit cafe
大阪市北区中崎西1-9-24 中崎ハウス202
http://biscuit-cafe.com/
C OOO（オーー）
大阪市北区西天満4-1-5 若松町センタービル 2c
▲06-6362-5150　http://www.outofoffice.jp/
D フレイムハウス
大阪市中央区淡路町1-6-4
▲06-6226-0107　misalele39@gmail.com　http://www.katana.
E 文化農場
大阪市中央区北浜東」1-33 広家ビル2F
▲06-6937-2127　http://ncf0303.blog68.fc2.com/
F タピエスタイル
大阪市中央区南船場4-4-17 B1
▲06-4963-7450　http://www5f.biglobe.ne.jp/~tapie/
G 欧風食堂 ミリバール
大阪市西区立売堀1-12-17 artniks bld.
▲06-6531-7811　http://www.artniks.jp/millibar/

大阪大学21世紀懐徳堂

●Handai-Asahi中之島塾

大阪大学が朝日カルチャーセンターと共催しているセミナーです。

13・20	火	1:30PM～3:00PM	「あなたのストレス、大丈夫?! ～IBS（過敏性腸症候群）から更年期まで」 石蔵文信（医学系研究科准教授） 受講料：3,150円（2回） ストレスで体調が悪くなり、頭痛、めまい、耳鳴などの症状に悩まされる方も多いでしょう。中高年になると“そろそろ更年期かしら”と考えますが、実際に更年期障害という医学的な用語はかなり曖昧に使われています。第1回目は胃・腸・心臓の症状、第2回目は男女の更年期の症状をわかりやすく解説し、心身ともに健康になるヒントをお話します。

会場／大阪大学中之島センター
問い合わせ／朝日カルチャーセンター（中之島）▲06-6222-5224

インターネット、電話、ファックスか、朝日カルチャーセンターの窓口でも直接申し込むことができます。

レクチャー&対話プログラム「ラボカフェ」

読書・哲学・鉄道など、毎月リアルタイムなテーマでカフェ風ワークショップを行っている、
京阪電車中之島線なにわ橋駅地下1階の［アートエリアB1］。1月のラインアップはこんな感じ。

14	水	7:00PM～9:00PM	中之島哲学コレージュ／哲学カフェ「人にあげられないものとは？」定員：50名 コーヒーを飲みながら、日常生活から科学や芸術まで幅広いテーマについて参加者みんなで議論を楽しみます。4・5月のテーマは「贈与」。「人にはあげられないものってある?」という身近な疑問から話し合います。 進行：森本誠一（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程） カフェマスター：本間直樹（大阪大学CSCD教員） 協力：Café Philo（カフェフィロ）
15	木	7:00PM～9:00PM	マンガカフェ4「見よ！地方マンガの底力！」定員：50名 地方を舞台にしたマンガ、地方在住のマンガが地方や全国に発表したマンガの魅力とパワーについて、九州出身の気鋭のマンガ学者・吉村和真さんとともに語り合います。 ゲスト：吉村和真（日本マンガ学会理事・京都精華大学国際マンガ研究センター研究統括室長） カフェマスター：伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター研究員） 金水敏（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長） 共催：京都精華大学国際マンガ研究センター
16	金	7:00PM～9:00PM	実践型：オルタナティブカフェ「建築をつくろう」定員：40名 私たちの暮らしを主に文化の視点から捉え直し、その意味や形態について考える公開ミーティングから発展し、裁縫や映画づくりなどの実践を踏まえます。今回は身近な素材の段ボールで、簡単な仕組みで「建築」をつくります。 カフェマスター：久保田テツ（大阪大学CSCD教員）、 家成俊勝+大東翼（ドットアーキテクツ）
21	水	7:00PM～9:00PM	鉄道カフェ「鉄カフェをみんなで考える12」定員：30名 我こそは！という鉄道ファンから、全くの初心者まで、幅広い層が参加する鉄道カフェ。参加者によるプレゼンテーションや素朴な疑問から派生した議論など、鉄道に関する様々な情報交換と対話が繰り広げられています。 カフェマスター：久保田鉄、木ノ下智恵子（大阪大学CSCD教員）
23	金	7:00PM～9:00PM	中之島哲学コレージュ／対話セミナー：問答法にチャレンジする（2）定員：20名 前回好評（!?）だった企画の第2弾です。今回も哲学カフェとは一風変わったやり方で対話に取り組んでみます。〈問答〉は哲学の基本です。問答法を実践してみましょう！ ゆるい雰囲気は性に合わないという方、大歓迎です。 進行：中川雅道（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程） カフェマスター：本間直樹（大阪大学CSCD教員） 協力：Café Philo（カフェフィロ）
28	水	7:00PM～9:00PM	シアターカフェ「舞台芸術の行方 2010」定員：50名 「シアターカフェ」では、関西や各地で演劇に関わる人と様々な話をしています。普段演劇に慣れ親しんでる方も、演劇なんて観たことないよという方も、これを機に少し、その世界を覗いてみませんか? カフェマスター：蓮行（劇団衛星 大阪大学CSCD教員） 大橋敦史（フリンジシアタープロジェクト 大阪大学CSCD特任研究員）
30	金	6:30PM～8:00PM	交通政策カフェ（関西交通政策実務者懇談会）「交通基本法の議論」定員：20名 京丹後市では赤字路線補助などが1億円にのぼるにも関わらず、クルマ依存であった。しかし上限200円運賃、パターンダイヤなどにより、利用者が急増、行政負担が急減した。この交通計画について担当者に伺い、併せて交通基本法の方向を議論する。 ゲスト：京丹後市企画政策課 野木秀康 カフェマスター：森栗茂一（大阪大学CSCD教員）

会場／アートエリアB1
参加費／すべて無料
開場／それぞれ開始30分前から

問い合わせ／［カフェの内容について］大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）▲06-6850-6111（豊中キャンパス代表）
［場所などについて］アートエリアB1 ▲06-6226-4006 ※内容は予告なく変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。
※申し込みは不要ですが、当日先着順とさせていただきます（入退場自由）。※お客さま参加型のプログラムです。

中之島ふらふら青春記⑪ 久坂部 羊

「ティーハウス ムジカ」での運命の出会い

中之島界隈には今もオシャレな喫茶店が数多くあるが、私が医学生だった30年ほど前は、紅茶専門店の「ティーハウス ムジカ」が有名だった。

ムジカは今は堂島に移っているが、以前は曾根崎新地にあった。ここでは世界中の紅茶を飲むことができ、また店名からわかるように、店内に流れるクラッシックの名曲を楽しむことができた。メニューには各紅茶の産地や風味、色合いなどが書かれていて、それを読むだけでも退屈しなかった。

臨床実習をしていた大学病院からも近かったので、私は友人たちとたびたびこの店に通っていた。そしてここで、ある女性と運命的な出会いをしたのである。

といっても、本人に会ったわけではなく、私が出会ったのは彼女のスケッチだった。当時、ムジカの壁には、世界中の紅茶のラベルが隙間なく貼られていたが、そのなかに2枚、古びたA4サイズの紙が混じっていた。1枚は鳥や花、もう1枚は海の中の魚や蛸が、黒いインクで実に奔放に描かれていた。鳥の嘴など、ふつうは輪郭を描くところを、ペンのたわみを生かした見事な線一本で表現されている。私は感心して、店の人に、これはだれの絵かと訊ねた。

「久坂葉子という、戦後に芥川賞候補になって、阪急六甲で飛び込み自殺した女流作家が描いたものです」

そのときは、ふーんと思ったくらいで、それ以上は調べてみようとも思わなかった。

ところがそれから6年後の1983年、私は新聞の夕刊に、一枚の奇妙なスケッチが出ているのを見つけた。女性の顔の絵で、右手で右目を隠している。その線の見事な勢いが、以前、「ムジカ」で見たスケッチと同じだったのである。記事を読むと、果たして久坂葉子の作品とある。彼女の遺品が、30年ぶりに菩提寺から実家にもどされたのを機に、神戸で展覧会が開かれるとあった。神戸に「久坂葉子研究会」というのがあって、研究誌も発行されていると書いてあった。

私はすぐに「研究会」に連絡を取り、『久坂葉子研究』を取り寄せた。それを読んで私は、彼女が川崎重工の創始者の曾孫で、男爵家の令嬢であり、文学以外にも音楽や絵付けの才能もあったことを知った。さらには、10代から4回も自殺未遂を繰り返し、19歳で芥川賞候補になったあと、自殺したときはまだ21歳だったこともわかった。写真も掲載されていたが、目と口の大きな、個性の強そうな美人だった。

それから私は久坂葉子の作品を次々と読み、その早熟の才能と、死への飽くなき傾斜に強い印象を受けた。

なかでも遺作となった『幾度目かの最期』

illustration: maki yoshimura

は、恋人、愛人、契約上の婚約者という3人の男性の間を、行きつもどりつしながら、死に惹かれる衝動を、手紙の形で赤裸々に綴った作品で、3日で100枚近い原稿を書き上げた大晦日、原稿を恋人に渡したあと、予告通りに自死を遂げたというすさまじい作品だった。

私が久坂葉子を知るきっかけとなったムジカのスケッチのことも、『幾度目かの最期』のなかに登場する。

喫茶店の主人が、いたずらがき帳をもって来てくれました。何かかいて下さいと。私はホットウイスキーをのんでいたし、多少、私の死と結びつけて考えられたので、いたずら書きをしました。いつもの皿に絵をかく調子で、さらさらと、海の中のと、花鳥の群とを。

これを読んだとき、私はもう一度あのスケッチをどうしても見たくなり、移転したムジカを探し出して訪ねた。すると、スケッチはレジの後ろの壁に額装して飾られていた。黄ばんだ紙に、前に見たのと同じ闊達な線と再会することができた。私はマスターの堀江敏樹氏に直訴して、カラーコピーを取らせてほしいと頼んだ。堀江氏は私の熱意に負けたのか、快く承諾してくれた。

当時、カラーコピーはまだ普及しておらず、大阪では梅田の紀伊国屋くらいでしかできなかった。しかも、上質紙への転写で、時間も1枚10分くらいかかり、値段も千円以上した。私は預かった額2枚を宝の地図のように胸に抱き、人にぶつからないよう気をつけながら、堂島から梅田まで歩いた。

できあがったコピーを手にしたとき、私はそれが彼女の死の2週間前に描かれたものであることを意識して、興奮と胸騒ぎに駆られたのを覚えている。

久坂葉子が堂島界隈に出没していたのは、彼女の師にあたる富士正晴が、当時、堂島の毎日新聞社の資料室で嘱託として働いていたからだ。[ムジカ」でも何度か待ち合わせをしていたらしい。

私は富士氏に葉書を書き、久坂葉子に興味があること、自分も小説家を志していることなどを書き送った。そして何通目かで許可を得て、茨木市安威の富士宅を訪ねた。

「竹林の隠者」と称される富士正晴は、当時、齢70の白髪頭ながら、奇妙な生気に満ち、「1週間ぶっ通しで二日酔いや」などと言いながら、私にビールを注いでくれた。そのグラスの底からは、先客が残したらしいタバコの吸い殻が舞い上がった。

富士氏は久坂葉子の死の直後に、その部屋に彼女の幽霊が現れた話をしてくれ、私の肩の後ろあたりを指して、「そこにぼうっと出てきはったんや」と言った。

何度か通ううちに、富士氏の主催で久坂葉子も参加していていた『VIKING』という同人雑誌の例会に来るように言われ、しばらくして同人にしてもらった。

私が久坂葉子に特別惹かれたのは、医師として常に患者の死と向き合っていたからかもしれない。死はだれにとっても忌まわしいもの。そう思い込んでいたが、ときどき、死にあまり抵抗せず、大袈裟に嘆いたりしない患者がいる。死を喜ぶわけではないが、泰然と受け入れている感じだ。そういう患者は、死を忌み嫌う人より、はるかに安らかに死んでいた。

死の神秘と魅力。私自身も、それに惹かれる気持があり、久坂葉子の作品に興味を持ったのかもしれない。

その後も私は久坂葉子のおっかけを続け、そのころまだ存命だった久坂葉子の兄、弟、伯母、同級生などを訪ね、貴重な証言を得た。『幾度目かの最期』の手紙の相手、「熊野の伯母様」にも2度、話をうかがった。

それらの資料は今も私の部屋に眠っている。いつか上梓できればいいのだが。

最後に、私のペンネームについてひとこと。これは久坂葉子にも由来するが、もう一つ謂われがある。私の本名が「久家」で、母の旧姓が「坂部」なので、ふたつを合させたのだ。名前は私の干支による。それで「久坂部羊」。

たまに、「久坂・部羊」と読む人がいるらしいが、おまちがえなく。

くさかべよう　1955年生まれ。大阪大学医学部卒業。
麻酔医、外科医、在外公館での医務官としても勤務した後、2003年『廃用身』（幻冬舎文庫）でデビュー。
現代医療への提言と生きること・死ぬことについて考える
契機に満ちた作風が人気を呼び『破裂』は10万部を超えるヒットに。
現在、北日本新聞ほかに「神の手」を連載中。
月刊『Voice』2010年1月号より、コラム「ニッポン新潮流」の連載開始。

月刊島民を「定期購読」しませんか？

ナカノシマ大学をはじめ、「学びの場」情報も加わり、
中之島から大阪へと拡大しつつある『月刊島民』。
「遠方に住んでいてなかなか手に入れられない」
「先月はうっかり取り損ねてしまって…」
ファンの方のそんな声に応えるべく、
昨年末から試験的に定期購読を行っていましたが、
来月からは本格的にスタートすることになりました。
毎月、確実に読みたい方はぜひお申し込み下さい。

●料金
5ケ月／1,000円（2010年5月号～2010年9月号）
11ケ月／2,750円（2010年5月号～2011年3月号）
※料金には送料・手数料を含みます。
※4月26日（月）までにお申し込みいただくようお願いいたします。
●お申し込み方法
郵便振替　口座番号：00990-5-299267
2.現金書留　料金を同封し下記の宛先までお送り下さい。
〒530-0004　大阪市北区堂島浜2-1-29　古河大阪ビル4F
月刊島民プレス（株式会社140B内）宛
◎ご入金を確認した時点で、ご連絡を差し上げます。
　郵便振替の場合、手続きに2週間前後かかりますので、ご注意下さい。
※諸事情により、到着が2～3日遅れる場合もあります。予めご容赦下さい。
※原則として、途中解約は受け付けておりません。
※ご記入いただいた個人情報は冊子・サービスを
　お届けするためだけに利用し、その目的以外での利用はいたしません。
●お問い合わせ　月刊島民プレス 定期購読係　T06-4799-1340

ナカノシマニア

捜索・文／松本 創（本誌）

島民リレー捜索で、昭和の橋を特定できた。

本誌15号で紹介した写真家のレンジャー前田さんから電話があった。橋の捜索依頼である。「お爺ちゃんが戦前に撮ったある橋を探しています。中之島の越中橋じゃないかと思うんですが、確証が得られません。何か手立てはないもんでしょうか」。

前田さんは、祖父が遺した写真の中の風景を訪ね、同じ場所から同じアングルで、現在の風景を切り取ることをライフワークにしている。

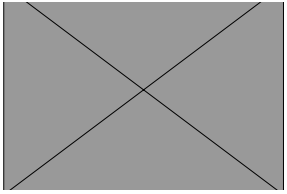
戦前と現代、2枚の写真を通じて亡き祖父と対話するのが目的だから、「たぶんここだろう」というユルさは無用である。

その写真では、親柱に橋の名前が刻まれているが、はっきり読めない。手掛かりは橋のたもとの建物。壁面に「三菱倉庫」とある。前田さんは当初、川口辺りの倉庫街に見当をつけて歩き回ったという。もちろん同社にも問い合わせたが、「古い話なんで分かりません」。やがて、廃藩置県後に藩の蔵屋敷が財閥系企業の倉庫となったことを知り、改めて中之島を歩くうち、越中橋にピンと来たのだという。が、越中橋は昭和39年（1964）にかさ上げされ、往時の面影はない…。

自称ナカノシマニアのメンツにかけて『月刊島民』は考えた。橋といえば、ぽむ企画である。本誌8号の連載「橋の話をしよう」を読み返すと、おお！まさにビンゴ。「（越中橋の）昭和初期の写真を見ると、北詰には三菱倉庫と住友倉庫が…」とある。さっそくその写真の出典を尋ね、『水の都・橋の都』という本に載っていることを教えてもらう。ぽむ企画からのメールにあった一文がうれしい。「レンジャー前田さんの活動、応援します！」。

前田さんと中之島図書館でその本を開くと、お爺さんの撮った風景とほぼ同じ構図の写真があった。「うわあ、こりゃドンピシャやね」と興奮気味の前田さん。足掛け3年の探索が実ったのだから当然だ。こちらも大仕事を為したような気がして誇らしい。メールで問い合わせただけなのに…。

ともかく、こうして「お爺ちゃんと俺の二人展」に新たな1枚が加わった。70年以上の時を隔てた越中橋の姿は、前田さんのブログで近日公開される。



撮影中の前田さん。「特別有名でもない橋を撮ることで、お爺ちゃんは、大阪の日常の風景を残したかったのかもね」。

祖父の写真と同じアングルで前田さんが撮った現在の越中橋。左手の住友病院の場所に三菱倉庫があった。もとは肥後熊本藩の蔵屋敷だったという。

開催します！ ナカノシマ大学EXTRA

講座&フォトトリップ「お爺ちゃんと俺の二人展」

前田さんが約3年前から取り組むライフワーク。祖父が撮った大阪や京都の風景を追い、ブログ（http://model-k.blog.so-net.ne.jp/）や講演会などで公開している。5月●日には、ナカノシマ大学の特別授業として、前田さんの写真講座を開催。10時30分から、淀屋橋の近代建築「芝川ビル」4階で。講演の後には、前田さんと共に中之島界隈を歩く写真撮影ツアーも！●参加費2,500円。申し込みはメールか電話・ファックスで月刊島民編集部まで。詳細はP9にて。

取材・文／大迫 力（本誌）

第14回

[カフェ リヨン]@朝日ビル

80歳の最先端ビルに帰ってきた、〝空飛ぶカレー。

渡辺橋の南詰に建つ朝日ビルの外観を見ると、いつも不思議な気分になる。水平ラインを強調し、美しく弧を描くデザインは明らかに今でも新しく格好いい。けれど、竣工したのは満州事変が起こった昭和6年（1931）。当時の人々が見上げた視線は憧れと驚きに満ちていたに違いない。

そんな朝日ビルの地下にある［カフェ リヨン］で最近人気を呼んでいるのが「中之島カレー」。実はこのカレー、戦後の連合軍による接収を終えた大阪国際空港から初めて飛んだ日本の民間機に、乗員食として「同乗」していたという逸話を持つ。

なぜ機内食のカレーが中之島とつながるのか。その答えは昭和27年（1952）にさかのぼる。接収後の大阪国際空港の機内食事業を引き受けた朝日新聞社は、大阪と福岡を結ぶ飛行機に、同社の従業員食堂で作った料理を運んだ。これがきっかけとなり、昭和36年に生まれたのが、この［カフェリヨン］を経営する朝日エアポートサービスという子会社だったのだ。

同社創業時に総料理長が考案した水を一滴も使わないカレーは、常客や乗務員からの好評を博した。「他では食べられないのか」との問い合わせも多く、ついに空港以外の店舗でも出すことになったそうだ。「ブランド化するなら、発祥の地である中之島にちなんだネーミングにしたかった」と、同社店舗企画マネージャーの石原秀幸さん。野菜をたっぷり使ったコクのある味は、なるほど人気を呼ぶのもうなずける。じわじわと効いてくる辛さと一緒に、中之島の知られざる歴史を噛みしめた。

新聞記者など朝日ビルで働く従業員の御用達。そのほか、朝日カルチャーセンターの受講者も多い。

玉ねぎをベースにした甘みと、後からだんだんと効いてくるスパイスの辛さが良いバランス。食後にはアイスコーヒーがとても合う。750円。もともとは「ジャワカレー」の名で出されていたそうだ。

カフェ リヨン

朝はモーニング、昼はランチセットと正しきオフィス街の喫茶店である。今後は夜のメニューも充実させる予定だそう。ブレンドコーヒー 350円、日替わりランチ700円。
T06-6226-5470　7:00AM ～ 6:00PM　土・日・祝休

上方講談師・旭堂南海の
シマノネタ 第十二回

大坂町人、「残念さん」に喝采。

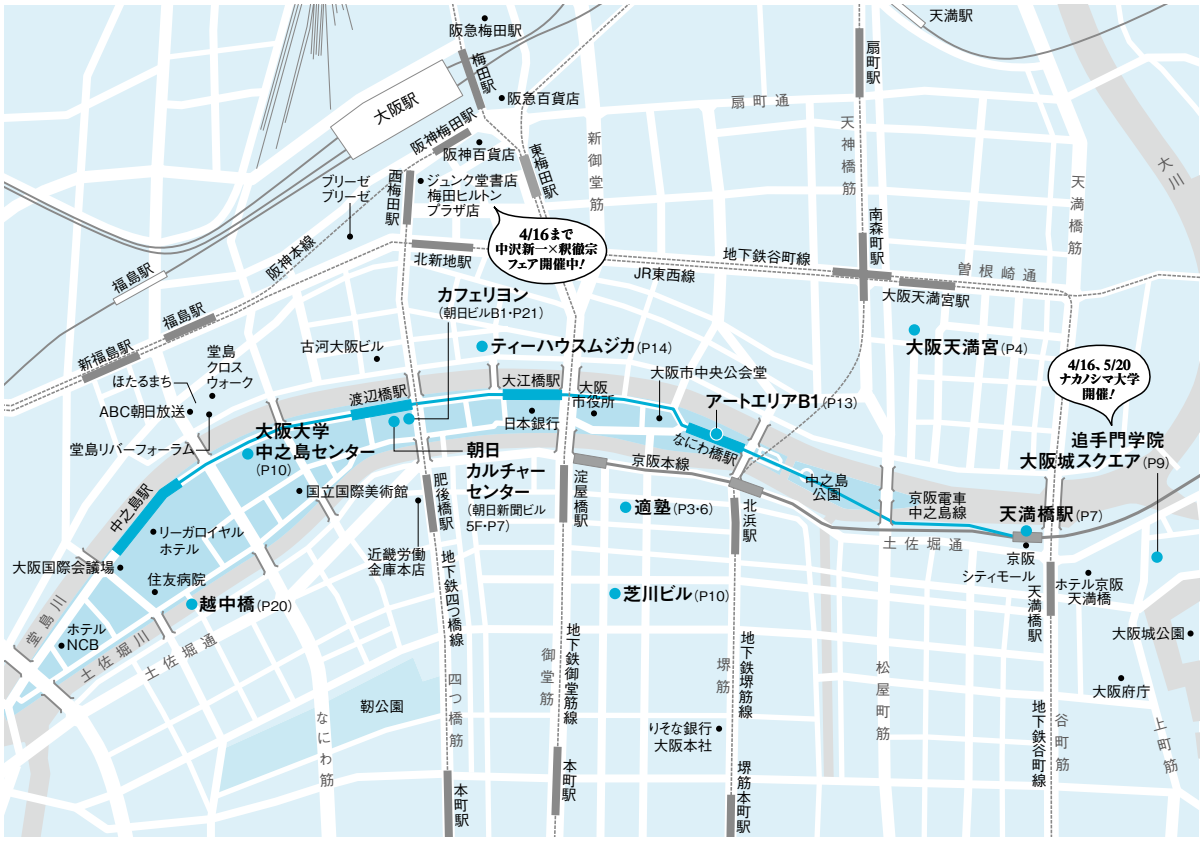
幕末、元治元年（1864）7月19日、倒幕を叫ぶ長州軍が京都に乗り込もうとし、薩摩・会津軍とぶつかった。禁門の変である。長州側は敗軍となり、散り散りに京から逃れるはめになった。その中に淀川を船で逃れる46名の長州藩士たちがいた。夜通し下って大川へ。八軒家は人目に付くので、桜宮で上陸しようとした。が、既に幕命帯びた捕り手が待ちかまえており一斉に捕縛された。

その時、「ドボンッ」「一人逃げたぞ」「どこだ」。逃れたのは山本文之助。29歳。長州の藩士侍である。山本は大川を流れ永代橋、推測であるが、天神橋界隈で小舟を奪ったのではなかろうか。

「あの人は長州の人でっせ」。幕府に楯突いて失敗しなすったんや」と大坂の人たち。誰も密告しようとする者はいなかった。

大「島民」

橋を渡って通う人、川を見ながら帰る人、
みんな「島民」です!



『月刊島民』はここでもらえます。

京阪電車関連：京阪電車主要駅／京阪シティモール／京阪モール／デリスタ天満橋店／ホテル京阪天満橋／ホテル京阪京橋
書店：ブックファースト梅田店／旭屋書店 本店／旭屋書店 梅田地下街店／旭屋書店 堂島地下街店／ジュンク堂書店 大阪本店／ジュンク堂書店 梅田ヒルトンプラザ店／ブックファースト 淀屋橋店／文教堂書店淀屋橋店／福家書店 淀屋橋店／天牛堺書店 大江橋店／紀伊國屋書店 本町店／ジュンク堂書店天満橋店／アバンティ BC OMMビル店／紀伊國屋書店 京橋店／隆祥館書店／なんば書店カルチャーコーナー
公共施設・大学関連施設ほか：大阪市中央公会堂／府立中之島図書館／大阪市役所市民情報プラザ／大阪市立中央図書館／大阪歴史博物館／大阪狭山市立図書館／奈良県立図書情報館／大阪国際会議場／市立住まい情報センター／大阪商工会議所／大阪市社会福祉研修・情報センター／大阪企業家ミュージアム／味の素 食のライブラリー／朝日カルチャーセンター／大阪大学中之島センター／大阪大学本部／大阪大学21世紀懐徳堂／摂南大学地域連携センター／慶應大阪リバーサイドキャンパス／追手門学院 大阪城スクエア／追手門学院 大手前センター／専門学校中の島美術学院／大阪工業技術専門学校／ろうきんギャラリー心斎橋／大阪倶楽部／芝川ビル／ N4タワーマンションパビリオン／ホテルNCB ／ ABC朝日放送／大阪フィルハーモニー会館
店舗・医院など：江戸前鰻料理 志津可／ラ・クッカーニャ／アリアラスカ マーブルトレ／ MANGUEIRA ／ Girond's JR ／じろう亭／ミニジロー／黒門さかえ／花かつ／ティーハウスムジカ／ MJB珈琲／平岡珈琲店／喫茶SAWA ／アンドール本町本店／あじさい／ BAR THE TIME 天神／タバーン・シンプソン／パストラーレ／ LES LESTON ／大西洋服店／上町貸自転車／ザ・メロディ／セブンイレブン大阪証券取引所店／吉田理容所／たまがわ鍼灸整骨院／宮崎歯科／心斎橋山田兄弟歯科／東郷歯科医院／ネイルサロンスワンナ

バックナンバーお譲りします。

2008年8月に創刊した『月刊島民』。大きな支持をいただいていることは、「バックナンバーありませんか？」と月刊島民プレスを訪ねてくる方々の多さからも伝わってきます。さて、そのバックナンバーにつきまして、1冊につき100円をいただくことになりました。号を重ねていくうちに保管用のスペースが必要となり、そのための維持管理費を負担していただく形です。何卒、ご理解とご協力のほど、よろしくお願いします。お問い合わせは下記の電話番号まで。

次号予告 ミュージアムを味わう

意外と灯台もと暗し？ 中之島にいながら、
数ある博物館・美術館に行ったことない人も多いのでは。
今年の連休はぜひ、中之島で過ごしましょう。
●『月刊島民』vol.22は2010年5月1日発行です!

編集・発行人／江 弘毅（編集集団140B）
編集・発行／月刊島民プレス
若狭健作　綱本武雄（株式会社 地域環境計画研究所）

松本 創　大迫 力（編集集団140B）
〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古河大阪ビル4階
Tel 06-4799-1340　Fax 06-4799-1341

制作進行／堀西 賢（ALEGRESOL）
デザイン／山●慎太郎

月刊島民 中之島 21号 2010年4月1日発行
編集・発行人／江弘毅（140B）編集・発行／月刊島民プレス 〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古川大阪ビル4階 定価0円 Printed in Japan